

CONTENTS

【解題】

- 一、飛錫について
 - 二、『寶王論』について
 - 三、『寶王論』の諸本について
 - 四、『寶王論』の末註書
 - 五、先学の研究
- 唐中期仏教思想主要研究論文

【資料篇】

原文・書下しに加え、克明な語註と待望の現代語訳

- 念佛三昧寶王論卷上 并序
- 念未來佛速成三昧門第一
- 變女群盜皆不可輕門第二
- 持戒破戒但生佛想門第三
- 現處湯獄不妨受記門第四
- 觀空無我擇善而從門第五
- 無善可擇無惡可棄門第六
- 一切衆生肉不可食門第七
- 念現在佛專注一境門第八
- 此生他生一念十念門第九
- 是心是佛是心作佛門第十
- 高聲念佛面向西方門第十一
- 夢覺一心以明三昧門第十二
- 念三身佛破三種障門第十三
- 念過去佛因果相同門第十四
- 無心念佛理事雙修門第十五
- 了心境界妄想不生門第十六
- 諸佛解脫心行中求門第十七
- 三業供養眞實表敬門第十八
- 無相獻華信毀交報門第十九
- 萬善同歸皆成三昧門第二十
- 跋寶王論後

【研究篇】

氣鋭の論攷を収載し、唐中期仏教に新視点を提示

- 『念仏三昧寶王論』における仏身論について▼曾根宣雄
- 唐中期における天台の動静▼楚金・飛錫を手掛りとして▼小林順彦
- 唐中期佛教における飛錫の位置▼鈴木行賢
- 『念佛三昧寶王論』流伝考―附現存諸本・註釈書紹介―▼吉田淳雄
- 飛錫の実践論―称名念仏と般舟三昧―▼石川琢道
- 飛錫の衆生論▼郡嶋昭示
- 飛錫の「是心作佛是心是佛」釈▼吉水岳彦

研究会員紹介

◎参加者（五十音順）

- 石川琢道・神達知純
- 工藤量導・郡嶋昭示
- 小林順彦・椎名一雄
- 霜村毅真・神宮良弘
- 鈴木行賢・曾根宣雄
- 高橋 学・宮部亮侑
- 横井克信・吉田淳雄
- 吉水岳彦・和田典善

◎執筆分担者（掲載順）

- 曾根宣雄（大正大学専任講師）
- 小林順彦（大正大学総合佛教研究所講師）
- 鈴木行賢（大正大学総合佛教研究所研究員）
- 吉田淳雄（大正大学非常勤講師）
- 石川琢道（大正大学非常勤講師）
- 郡嶋昭示（大正大学総合佛教研究所研究員）
- 吉水岳彦（大正大学総合佛教研究所研究員）



B5判・上製・箱入・総420頁・口絵付
定価 18,900 円（税込）
ISBN978-4-903470-41-2 C3015



中国で展開された独自の念仏思想と

中国天台における暗黒期を照破！

大正大学総合佛教研究所 研究叢書第22巻

念佛三昧寶王論の研究

ノンブル社

天台・浄土・真宗、禅・真言等も包摂する

飛錫の寶王論に待望の現代語訳

唐中期仏教思想研究会

代表：曾根宣雄／小林順彦

編

♣ご注文・お問合せは下記へお願いします

図書出版 **ノンブル社**

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 1-8-22-2F
電話 03-3203-3357 FAX 03-3203-2156

●本書を推薦します

大正大学学長

多田孝文

中国隋唐の仏教は、諸宗派大成の時代といわれる。俱舍・天台・華嚴・法相・密教・禅・律・念仏などの諸宗が開花し隆盛を極めた時代であった。

ただし、天台は七世紀中葉の二祖章安以後、六祖湛然が活躍をする八世紀中葉まで約百年間、その教盛は振るわず、暗黒時代とも言われ、天台宗史も不明の点が多いのである。

ところが、この度発刊された『念佛三昧寶王論』の著者である飛錫は、湛然と同時代に唐都長安において、玄宗・肅宗・代宗の信任を得て活躍した、天台僧としては異色の存在である。

唐中期仏教史上に一石を投ずる

大正大学総合佛教研究所所長

高橋尚夫

大正大学総合佛教研究所（以下綜佛とする）には講師、研究員、研究生が常時五十人前後所属している。運営としては研究会組織を取っており、講師あるいは研究員が研究代表者となり、現在十三ほどの研究会が開かれている。一サイクル三年で何らかの成果を出すことが義務づけられているが、このたび唐中期仏教思想研究会（唐中研）の手によって『念佛三昧寶王論の研究』が綜佛の研究叢書第二十二巻として刊行された。筆者が六年前、綜佛の所長に就任したときは唐中研は第二期目に入ったところであった。

綜佛の理想とするところは、大正大学の特徴である浄土・天台・真言・

大正大学名誉教授・文博

多田孝正

中国の天台を学ぶ者は、南岳慧思から天台智顗へ、そして荆溪湛然を経て四明知礼へ、という所謂正統天台と称される系譜を辿ることになる。このなか六祖湛然が活躍した唐代中期は、中国仏教史のなかでもっとも隆盛を見た時代であった。

しかしこの時代は一方、天台においては暗黒時代とも言われ、湛然が江南に於いて天台を中興する以前、もしくは同時代の諸師達の動向が判然としていない。したがって唐代の天台は、三大部の注釈書を著した湛然に代表されてしまう感が強い。このことを否定するつもりは毛頭ないが、正統天台という捉え方が果たして妥当なのかどうかを考えてみた場

法華・念仏思想の融合

大正大学元副学長

小澤憲珠

この度、大正大学総合佛教研究所より天台・浄土・史学に属する気鋭の研究者による共同研究の成果が出版されることになりました。中国唐代中期の飛錫が著した『念佛三昧寶王論』の原典研究の書です。綿密な原典の校訂と現代語訳は、謎につつまれた飛錫の核心にせまる研究書になると思います。

中国唐代の中期には、インドから流入した経典や論書はすべて勢揃いしています。またそれらを研究するすべての学問宗も成立していました。そしてその上に、インドには見られない中国独自の仏教が花開く時代になります。飛錫はそのような時代に長安を中心に活躍するの

円・密・禅・戒を網羅

大正大学教授・浄土学主任

廣川堯敏

本書は大正大学総合佛教研究所所属の天台学・浄土学・史学の若い研究者諸氏が、九年間という長期にわたる共同研究の成果を世に問うものであって、その御苦労の末の大願成就、誠に同慶の至りである。

飛錫の仏教思想は、従来、天台宗・浄土宗の狭間にあって、両方の研究者からほとんど注目されてこなかった。その教学には、「天台・禅・念仏」の一致や双修、さらには信行の三階教の影響、あるいは戒律・密教等、きわめて幅の広い仏教思想が示されている。したがって、その思想・信仰の解明には仏教学全般にわたる、広く総合的な仏教知識が要求されるが、若い研究者諸氏はよくそれに答え成果を出してくれ

日本浄土教に影響すること大

飛錫の特徴は、天台法華思想の教行双修を根底にして、当時の各宗、いわゆる禅・戒・密や三階教に到るまですべてを容認し、これらとの調和融合につとめたことにある。

この飛錫の異色の活動が、湛然をして天台教学の根本的基準を大いに提唱しなければならなかった要因である、とも言えるのである。

本書『寶王論』の解説探究にあたった研究会の構成員は、仏教・真言・浄土・天台・歴史それぞれの学を窮めようとする若手有志であり、本書は総合的視点からの研究報告である。

唐中期仏教史上に一石を投ずる、興味深く意義ある研究書であるといえる。

仏教・梵文に加え、歴史・国文・中、西哲・宗教等各分野の研究者が共同して研究をすすめるところにあるが、なかなか理想通りには行かないのが現状である。しかし、この研究会は綜佛を代表するといっても過言ではなく、天台・浄土・真言、歴史の俊秀があつまっている研究成果である。先行研究の紹介をはじめ、解題、本文校訂、研究論文等、微に入り細に亘り非常に信頼の置ける学術書となったことは研究所を預かるものとして誠に慶賀に堪えない。内外において綜佛の名を高からしめるものであると自負する次第である。内容についての紹介は諸先生の推薦文に譲るが、斯学にとってはこれ以上纏まったものではなく、必読の書であることを江湖に推薦するものである。

合、それが全てではないように思うのである。

このたび発刊された『念佛三昧寶王論の研究』は、まさにこの問題を想起させるものである。『寶王論』を著した飛錫は、唐代に帝都長安で活躍した天台系の人物であるが、これまで余り注目されてきたわけではない。しかし僧伝を紐解けば、江南から遠く離れた長安で、天台の学風を宣揚していたことが知れるのである。このことは非常に興味深い。

飛錫は天台の法華思想と念仏を融合させ、『寶王論』の中で独自の説を展開させている。これは飛錫が不空三蔵をはじめ、様々な諸師達と交渉をもった結果であろう。また、唐代には玉泉天台の流れがあったことも指摘されているが、その全容も未だ明らかではない。三階教や諸宗との融合が見られる『寶王論』を研究した本書は、この領域への一助にもなるはずである。

です。

しかし飛錫については多分に謎が多いのです。一般に彼の思想には、法華、念仏、禅、戒が融合されているといわれています。さらに止雨の祈祷を行ったともされ、訳経者の不空との交流など、密教の要素もうかがわれます。ただし彼の著作の中で、現存するのは『念佛三昧寶王論』のみなのです。この書物は飛錫の研究に不可欠のものであり、しかもそこにはインドにも、さらには日本にも見られない独特の念仏思想が展開しています。

一例をあげれば「どのような悪人でも、すべて未来の仏であるから、阿弥陀仏や釈迦仏と同等に念ずべきである」といった内容が説かれています。まさに中国で培われた独特の念仏思想といえます。この書は八世紀以後の中国仏教研究の大きな一助になると思います。

たものと評価している。

浄土宗の立場から言えば、この『念佛三昧寶王論』の浄土教思想は、善導・法然のいわゆる純粹浄土教とは異なる。しかしながら、日本浄土教では、法然の弟子の親鸞が『教行信証』に引用し、浄土宗の三祖良忠が『観経疏伝通記』『選択弘決疑鈔』等に引用している。

道綽・善導が活躍した七世紀の中国浄土教と飛錫・法照が活躍した八世紀の中国浄土教とは、どのような点で異なっているのであろうか。ともすると、我々は日本浄土教の視点からのみ中国浄土教を見がちであるが、中国浄土教そのものの真実の姿を飛錫の思想の中に見いだすべきではなからうか。これから中国浄土教研究を目指す若い研究者諸氏に、ぜひとも本書の熟読を推奨したい。